『縁起経釈』における無明の語義解釈
——世親の否定詞論——

楠 本 信 道

I. 問題の所在 Abhidharmakosābhaṣya (以下『仏書論』) で世親は‘a-vidyā’という語における‘a-’ (=naN) という否定詞の意味を問題にし、無明の意味を「明と対立する別のダルマ」(Pradhan ed.: p. 141, l. 1: vidyāvipakṣo dharma ‘nyāḥ) と解す。無明と対立関係にある「明」とは慧 (prajñā) を意味するダルマである。この無明の解釈について、宮下晴輝氏は『阿毘達磨大毘婆沙論』(以下『婆沙論』) の提示した問題を Yogacārabhūmi (以下『瑜伽論』) が受け継ぎ、さらにその議論を世親が『仏書論』で展開したのだと指摘する1)。ところで‘a-’という否定詞には6つの意味があることが知られるが2)、それらはかなり後代になって文法学派、あるいはインド哲学において認められるようになったものである。世親がこの6つの意味を『仏書論』で意識していたかどうかは明らかではないが、世親は『仏書論』以降の著作 Pratityasamutpādavyākhyā (以下『縁起経釈』 D 3995, P 5496) において否定詞の意味を7つの解することが、Marek Mejor 氏によって指摘されている3)。そこで、本稿では『縁起経釈』の無明に関する否定詞の7つの意味を明らかにし、それらの7つの意味のうち、どれだけの意味が『婆沙論』・『瑜伽論』4)・『仏書論』において見られるのかを考察することにしたい。

II. 『縁起経釈』における否定詞の意味 『縁起経釈』 (D 7a4-7b1, P 7b5-8a2) で世親は(1) 存在の否定 (yod pa ’gog pa)・(2) 別であること (gzhan nyid)・(3) 似て別なること (dra ba gzhan nyid)・(4) 非難されるもの (smad pa’i don)・(5) 小さいもの (nyung ba’i don)・(6) 欠いているもの (bral ba’i don)・(7) 対立するもの (gnyen po’i don) という項目を以て、否定詞を7つの意味に解す。この7つを文法家の用いる否定詞の意味にあてはめた場合、非存在 (abhāva)・差異 (anyatva)・類似性 (sādhyā)・劣性 (aprāśastyā)・小ささ (alpata)・対立 (virodha) という順で対応するが、世親の7つの解釈のうち (6) 欠いているものという項目は、文法家の解釈のどれにも対応しない形になる。

それでは、以上の7つの意味のうち、世親が‘a-vidyā’の‘a-’という否定詞
の意味として妥当と考えているのは、どの意味なのかを以下見ていく。

まず『縁起経』(D 7b2-8a1, P 8a3-8b3) では (1) 明というものの単なる非存在という解釈が考察され、絶対否定 (prāsañjapratīṣedha) という視点で議論される。世親は、非存在は諸行が生ずる増上縁とはならないと言及し、無明が縁として定義される以上、実体でなければならないという点からこの解釈を否定する。なお、この議論では有部の五位七十五法の体系で無明が大煩悩地法の愚癡 (moha) と同義であることから、無明が非存在であってもならないことも考慮される。

次に『縁起経』(D 7b5-8a1, P 8a7-8b3) では、(2) 明以外のもの・(3) 明と似て別のダルマ・(4) 非難される明について考察される。まず (2) 明以外のものについて、世親は無明を「明以外のもの」と考えた場合、眼等も無明に含まれてしまうと言及し、‘a-vidyā という語の ‘a-’ という否定詞が相対否定 (paryudāsa) の意味であるなら、明以外のものがすべて無明になってしまうという問題を指摘する。また (3) 明と似て別のダルマについて、世親は、無明を、明すなわち慧の一つとして認めるならば、汚染されていない無記なる慧も、明と似て別のダルマであるから、無明になってしまおうと説明する。次に (4) 非難される明について、世親は、非難されるということを「悪い・「汚染されている」という意味に捉え、無明を「汚染されている慧」と結びつけて議論する。

次に『縁起経』(D 8a1-5, P 8b3-7) では、(5) 小さい明・(6) 明を欠いているものの・(7) 明と対立する別のダルマについて考察される。まず (5) 小さい明について、世親はこの「小さい」ということを「不完全なこと」として捉え、無明を明ではあるが、それが完全でないものとして説明する。次に (6) 明を欠いているものについて、世親は「眼等すべても無明ではない」という理由でこの解釈を否定するが、この理由は上述した (2) 別であることに対する説明と重複している。だが、この項目は『縁起経』(D 7a7, P 8a1) で「比丘のいない場所」 (slong med pa'i gnas)・「水のない砂漠」 (chu med pa'i dgon pa) と説明されているから、何かを欠いているもの、すなわち、あるものを欠けてしまうが存在しているものとして定義されている。最後に (7) 明と対立する別のダルマについて、世親は 7 つのうちこの解釈を無明の解釈として妥当とするとしている。つまり、この解釈は『仏舍論』における定義と共通するものであり、世親は『縁起経』でも同じ考えに基づいて、無明を解釈していることがわかる。また、世親は無明の自性の議論についても、無明は自性としては知られないが「透明清浄な色」のように行為の作用によって知られるという見解を導いている。

－359－
III. 『婆沙論』における否定詞の意味 『婆沙論』(T27, 129b28-129c3) では、無明の意味が通達することや知ることの否定ならば、無明を除く別の諸法についても無明であることを示すという非難が見られ、すでにこの解釈で後の世親の定義する (2) 別であることに対応する意味が見られる。

IV. 『瑜伽論』における否定詞の意味 『瑜伽論』(Viniścayāsamatīraṇī D 4038; 83b6-85al, P 5539; 87b1-88b2) では、まず無明が明 (vidyā) と対立するものとして言及されており、『縁起経論』における (7) 対立するものに対応する定義が見られる。さらに「明の非存在」と「虚妄智' (log pa'i shes pa) という解釈が見られるが、これらはそれぞれ (1) 存在の否定と (4) 非難されるものという世親の定義に対応する。そして、二つの智は連合しないという視点は『倶舍論』の議論へと組み込まれることになる。

V. 『倶舍論』における否定詞の意味 まず『倶舍論』(p. 140, l. 24-p. 141, l. 8) では、(2) 別であること・(1) 存在の否定・(7) 対立するものという解釈が見られる。世親は眼等が無明でないことや、無明が諸行の縁であることから (2) と (1) の解釈を否定し (7) の意味だけを認めている。上述した『縁起経論』が、この『倶舍論』の議論を受けていることは明らかである。

次に『倶舍論』(p. 141, ll. 8-11) では、(4) 非難されるものという解釈として、無明が「悪い慧」すなわち「見」なのかという議論がある。この解釈はすでに見た『瑜伽論』の「虚妄智」の議論を展開したものと言える。敵者を「悪妻」(kubhāryā) が「妻でない者」(abhāryā) と呼ばれる例を持ち出し、これを無明に当てはめ、無明を「悪い慧」(kuprajñā) に理解する。つまり、敵者は無明を「慧」の一つと見なし、「a-' という否定詞の意味を「ku-’ (悪い) という意味に理解しているのである。しかし、有部は無明が悪い慧であるならば、悪い慧は「見を本質とする」ことになるとしてこれを退け、そもそも「見」とは慧の一つとして定義されるものであり (p. 58, l. 7)，さらに「見」には、世間的な正見や有身見等の五見が含まれる (p. 29, ll. 12-20)。つまり、ここで有部が「悪い慧」として当てはめているのは「五見」のことなのであるが、「見と無明は結びして別個に説説される」(Abhidharmakośavyākhyā. Wogihara ed.: p. 301, ll. 17-18) という称友の言及からも明らかのように、五見が「無明」であることには変わりない。

また『倶舍論』(p. 141, ll. 11-14) では、敵者が「見でない慧」が無明のではないかと反論する。上述の議論で問題になった「悪い慧」とは、見であり且つ慧であるものであるから、「五見等」を意味し、一方、今問題になっている「見でな
いもの」とは、慧であるが見ではないもの、すなわち「有漏の智」を意味する。しかし、有部は無明が慧であるならば、見と無明が連合することができなくなるとして、この解釈を理証によって退ける。

さらに、『俱舎論』(p. 141, 15-19) では、教証に基づいて、無明が慧ではないことが示される。なお、上述の議論では、無明は、汚染された慧ではないかという前提で言及されているから、『縁起経経』において、無記なる慧として例証される「明と似て別なるダルマ」という視点からは『俱舎論』では議論されていない。そして『俱舎論』(p. 142, 3-8) の無明の自性に関する議論で、無明は「透明清浄な色」の例を以て説明されるが、『縁起経経』の無明の自性に関する言及もこの『俱舎論』の議論を受けていることがわかる。

VI. 結論 『縁起経経』に展開される否定詞の7つの解釈のうち、(2) 別であることをいう解釈は『婆沙論』に現れ、(1) 存在の否定・(2) 別であること・(4) 非難されるもの・(7) 対立するものが4つの解釈は『瑜伽論』に見受けられる。そして『瑜伽論』と同じ4つの解釈が『俱舎論』でも再検討される。このような過程を経て、世親は『縁起経経』を著作するに至って、これら4つの解釈に残り3つの解釈を加えているのである。このように、世親は『縁起経経』で、7つの否定詞解釈を提示するが、無明の解釈として妥当するものを「対立するもの」と捉え、『俱舎論』と同じ解釈を採用していることが明らかである。

1) 宮下 [1992: 5-12] (「無明と諸行－『俱舎論』における心と形－」『日本仏教学会年報』57) 参照。
3) Mejor [1997: 156, fn. 34] (On Vasubandhu’s Pratītyasamutpādaavyākhya. Studia Indologiczne 4) 参照。
4) 本稿では『婆沙論』と『瑜伽論』『毘婆沙』における無明の定義については、宮下 [1992: 5, 10-12] がすでに論じた箇所を扱った。
5) 慧・見・智の関係については宮下 [1983: 20, fn. 12] ([『仏学論註釈書 Tattvārtha』の試訳—第七章第一偈より第六偈まで—]『仏教学セミナー』38) を参照された。

（キーワード） 婆沙論、瑜伽論、毘婆沙、仏学、縁起経経、世親、否定詞、なNaN

(広報大学大学院)